

緩話

急題



生活情報部
福士 千恵子

東京中央郵便局の建物が一部保存される見通しだが、外壁だけでなく内部の雰囲気も残してほしいものだと思う。はじめて足を踏み入れた40年前の印象が、今も強く残る。黒大理石張りの柱のせいから空間そのものがほの暗く感じられ、そこに規則正しく四角形を連ねた窓から光が差し込んでいた。明るさと暗さが織りなす空間美は忘れられない。思えば、昼も夜も(こうこう)と明るい今とは異なり、街にも屋内にも、明暗がくつきりと存在していた頃だった。

意図的に作られた暗闇を体験す

暗闇体験

「ラヤミ食堂」では、目隠しをして見知らぬ客同士がテーブルにつき、グラスや皿の位置を教え合い、協力して料理を回す。においをかぎ、味や食感を試し、「何でしょうね、これ」などと意見を交わす。視覚が遮断されると、音や触覚が多くの情報を内包していることに気づく。人とのかわり方も変わる。相手を名刺や外見で判断し

る催しが、若い世代を中心に人気を集めている。目隠しをして食事をしたり、真つ暗な会場内を歩いたり。もともと欧州で広がった試みで、視覚障害への理解を広げる、視覚以外の感覚を呼び覚ますなど狙いはさまざまだ。

いくつかに参加してみた。「ク

希望を紡ぐ4つの柱

ない。言葉を尽くして対話する。他人に対して寛容になり、内省的で穏やかな気持ちも生まれた。

「クラヤミ食堂」は、2007

年から季節ごとに開催されており、計1000人余りが参加している。企画する博報堂(ごもご)の製作所の軽部拓(たか)さんは、「子

供のような好奇心、五感の豊かさ、人とのつながりなど、社会が失いつつあるものを回復するきっかけになれば」と話す。

食後、参加者はペンを渡され、目隠しのまま、心に浮かぶことを紙に書く。後日、一人の参加者のものを見た。星の絵に「HOPE

(希望)」と書き添えてあった。

☆

東京大学社会科学研究所は2005年春から「希望学」という研究プロジェクトを行ってきた。今月開かれた成果報告会で、同研究所教授の玄田有史(し)さんは、「先が見えないから面白い」「まだ見えていないものがあるはず」という想像力によって、不安は希望に変

わると話した。

希望とは何だろう。希望学プロジェクトでは議論を重ね、こんな定義をまとめた。「具体的な『何か』を『行動』によって『実現』しようとする『願望』である」

「希望を持って」と声高に叫ぶより、この四つの柱を丁寧に解きほぐし考えていくことで、希望がみつかる。それは私にとっても発見でした」と玄田さんは言う。

記憶にある東京中央郵便局の窓から注いでいた日差しは、右肩上がりの高度成長期、子供も大人もあまねく浴びていた「希望」という光だったのかもしれない。今は光が外から差し込む時代ではない。ただ、「四つの柱」を一人一人が具体的に考え、希望を紡ぎ出していくことは可能だ。あすから4月。心躍るスタートばかりではないだろうが、暗闇が教えてくれることもあるはずだ。